

職業としての法律家

加藤 新太郎

一 はじめに

只今ご紹介にあずかりました司法研修所の加藤です。小口先生、鈴木先生には過分のご紹介をいただきまして、恐縮しております。

本日は早稲田大学の学生の皆さんに対してこのように話をさせていただく機会に恵まれ、大変光栄に思っております。早稲田大学には学会や研究会などで参上することがありまして、鈴木先生、鎌田先生には日頃から御厚誼をいただいております。また、三月まで客員教授として勤めておられた石丸俊彦先生は、私の司法修習生時代の刑事裁判教官で、爾来御指導を仰ぎ、お世話になっています。さらに、皆さんの先輩が司法研修所に、最近では毎年一

二、三〇人入ってきました、一大勢力であると同時に、私の教官時代の教え子にも何人かいるわけであります。そうしたことから本日の機会が与えられたように思います。

本日のテーマは、「職業としての法律家」です。本題に入る前に、このテーマをどういつもりで話すのかという辺りから、私のバックグラウンドを敷衍しながら入っていきたいと思います。

私は、昭和五〇年に判事補に任官しまして、二〇年経て、二十一年目に入ったところです。定年まで裁判官として勤めますとあと二〇年あるということで、ちょうど折り返し点に來たということになります。最初に勤務したのは東京地裁で、刑事裁判の左陪席からスタートしました。昭和五〇年ころの東京地裁の刑事部は、まだ、学生事件、公安事件などがかなり残っておりまして、いわゆる「荒れる法廷」なども経験いたしました。刑事事件の訴訟指揮は、臨機応変に即断即決していかなければならないといわれていますが、それを目の当りにしたわけです。

その後、名古屋家裁では家事事件と少年事件をそれぞれ専務で一年ずつ経験しました。家事事件では調停委員さん方と調停を担当することがありますが、当時は「家庭でも役所でも家事をしています」というようなあまり受けないジョークを飛ばしていました（笑）。

その次に最高裁事務総局の総務局で局付として勤務しました。そこでは裁判官や裁判所職員の定員管理をしたり、書記官事務の企画運営をしたり、判例集の編集事務や法律図書館資料の購入事務などをするほか、国会対応をしたり、予算折衝をするといった司法行政の見習いの仕事を経験しました。

その後、大阪地裁に行きまして、民事部の民事交通・労災事件の専門部で仕事をしました。民事交通訴訟では、被害者の早期救済という趣旨で和解的解決が多くされますが、そのダイナミズムを実感した時期でした。

そして、釧路地・家裁では民事と家事を担当しました。小なりといえども本庁です。行政事件、労働事件や医療過誤事件、国家賠償事件などもあり、結構バライティに富んだ事件構成で大変勉強になりました。釧路から一二〇キロ離れた根室標津という所に家庭裁判所の出張所がありますが、そこに月一度填補に出かけるということも経験しました。

昭和六三年に司法研修所の民事裁判教官になりました、平成四年の十一月から事務局長ということになっていきます。

今までに担当してきた仕事を見ますと、民事事件、刑事事件、家事事件、少年事件をそれぞれ専門でやる時期があったわけですが、これは大変よかったと思っています。裁判官の中には刑事事件しかやったことがないとか、民事事件しかやったことがないという人もいますが、いろいろ経験したことは、うまくはできないまでも、一通り何でも何とかこなせるという自信になっていくように思います。

仕事として特色があるというのは、やはり司法研修所教官ということになります。司法修習生は二年間で法曹三者のうちの何になるか進路を決めなければなりません。そこで裁判教官になりますと、「裁判官になってどうですか、よかったですか」と聞かれます。それはいろいろな意図で、いろいろな文脈で聞かれるわけなのですが、いくつかの答え方があります。例えば、そうした質問に対して、「いやあ、本当によかったと思いますよ。どのくらいよかったかというと、生まれ変わったら別のことをやってみたいぐらいです」と（笑）。あるいはまたこういう答え方をしたこともあります。「裁判官というのは本当にいい仕事で三日やったら辞められないんですよ」と言いますと、それを真に受けて判事補になる人が出てきます。そこで判事補になったところで、「裁判官というのは本当

にいい仕事で三日やったら辞められないんですよ。しかし、四日目になると辞めたくなくなっちゃってね。」と（笑）。こちらの方は、その思い悩むであろう四日目を判事補としてどういう心構えで過ごすべきかという話に続くわけなので、それなりのメッセージが込められているのですけれども、前の答えは冗談で、実際には、後に述べるように裁判官になってよかったと思っています。

ところで、こうした裁判官、あるいは裁判官も含めた法律実務家の生活や職業としての実態はあまり知られていません。普通はむしろ間違ったイメージを持たれているように思います。小説あるいはテレビ、映画からイメージを形成するというのが一般で、どうも実際とは違ったイメージが定着しているようです。

例えば、裁判官ですと大体謹厳な年寄りを頭に描きます。任官した最初から年寄りというはずはないのですけれども、多くは年寄りをイメージしまして、裁判記録に埋もれた生活をしている、受け身の仕事であって頭が固く、融通もきかず、面白味もない石部金吉であるとかみているのではないかと思います。最近では、裁判官が社会勉強をするという趣旨で新聞社などの報道機関で研修をしています。新聞記者から多くされる三大愚問というのがありまして、それは、「裁判官は赤ちやうちんで飲みますか、マージャンをしますか、カラオケに行きますか」というものです。もちろんすべてするわけですが、世情に通じた新聞記者でもそういう質問をするということ自体、裁判官の実際がよほど知られていないことを表わして余りあるものであると思います。

検察官でも同じであります。上命下服である、権力志向の人が検察官になっているのではないかというイメージがあります。中には検察官になると皆同じ色の同じネクタイをしなければいけないと思っている修習生がいます。どうしてかと尋ねますと、「いや、検察官同一体（タイ）の原則があると聞きました」（笑）。

弁護士さんに対しては、お金をありがたがる拝金主義者というイメージがあります。そして、困ったときに出てきてもっと困った状態にしてしまふ（笑）。格別の根拠があるわけではないのに、莫然とそういう人種であるというイメージを持っている人が少なくないように思います。

一口に裁判官、検察官、弁護士といってもその役割が異なりますから、日常の仕事の内容もやり方も異なります。その点はお断わりした上で、法律実務家がどのような気持ちで、どのような仕事をしているのかというところをお話していきたいと思います。具体的に話すようにするため、裁判官の仕事を例にとることが多くなりますが、この点も御了承下さい。皆さんの中に、「なるほど法律実務家はそういう仕事をしているのか。それでは私もそれになってみたい。」ということで一つ頑張ろうという人が出てきてくれると私の話の目的は達したということになります。

二 法律実務家が対象とするものは何か

1 「笑う時だけ」の小話

「法律実務家が対象とするものは何か」という話に入りますが、私の好きなアメリカのジョークに「Only when I laugh」という話があります。どういう話かというと、道を歩いていますと向こうから腹に槍の刺さった人が歩いてくるわけです。こちらは全然知らない人なのですけれども、つい尋ねてしまいます。腹に槍が刺さっているのですから、「痛くありませんか」と。その人が答えていわく、「いや、笑うときだけです」（笑）。こういうジョーク

なのです。

これは、ただ単に無邪気に笑っておけばよい話でありますけれども、一人よがりかも知れませんが、含蓄があるようにも思います。というのは、腹に槍の刺さっている人は笑うときだけ痛いではなくて、いつも痛いに決まっている。それはもう誰が考えても分かるわけですが、そういう人を見るとつい「痛くないですか」と聞いてしまうというのは二つの理由が考えられます。一つは、尋ねる側に思慮が足りないから、間抜けだから少し考えれば分かることを尋ねてしまうということが考えられます。もう一つは、それは確かに少し考えたら分かるだろうけれども、分かっているにも「痛くないですか、大丈夫ですか」という意味で声をかけるといことはある、他者に対する思いやり、人間性の発露でそういう声をかけるといことが考えられます。

一方、腹に槍の刺さっている人の答えも、二つの動機でそのように答えるといことが考えられます。一つは、いつも痛いの決まっているわけですが、「痛くありません。笑うときだけです。」と答えるのは、虚栄心、見栄によるものであると考えられます。もう一つは、いつも痛いのですが、苦しくても弱音を吐かない、歯を食いしばって我慢する。こういういわば人間の尊厳に基づいて「笑うときだけです」という答えをすることも考えられるわけです。

そうしますと、組み合わせは四つありまして、間抜けな質問に対して見栄で答える、思いやりのある動機に基づく質問に対して見栄で答える、間抜けな質問に対して人間の尊厳に基づいて答える、思いやりのある質問に対して人間の尊厳で答える。この四つのパターンが考えられるわけがあります。

そこで本題に引きつけてこれを解釈しますと、我々法律実務家が対象とするのは、比喩的に言うくと、腹に槍の刺

さった人、つまり困難な問題を抱えて苦しみに耐えている人であり、弱さと人間の尊厳を併せ持っている人である。したがって、できるものであれば、思いやりのある接し方をしなければいけないのではないか。しかし、前の例でも、思いやりに基づく質問に対して見栄で答えるというパターンがあるように、その結果が報いられるかどうかは分かりません。けれども、法律実務家は、そうした人間を対象にして仕事をしているという事実に思いをいたさなければならぬのであります。

2 ある「名の変更」事件

名古屋家裁時代に経験した「名の変更事件」を紹介することにします。

名前というのは親がつけてくれるわけですが、戸籍法によりますと、「正当な事由」があれば名の変更を申し立て、家庭裁判所の許可が得られると、これを変えることができます。例えば、珍奇な名前とか、同姓同名の人が近所に住んでいて日常的に不都合が生じているというケースであれば、正当な事由があると判断されます。その事件の申立人は目の不自由な人で、年の頃は中年にかかる独身の女性です。もともと目は弱かったけれども、見えた。それが成人してからだんだんかすむようになって、ある日全然見えなくなったというのです。その申立人は比較的経済的に恵まれた家の人でしたので、東に名医があると聞けば診てもらい、西に霊験あらたかな宗教があると聞けばお参りをしてきたけれども、全然その甲斐がありません。医者に診てもらうと、医者は口をそろえて、「器質的な異常はありません。だから見えるはずですよ」と言われるため、治療のすべもないという状態で悲嘆の日々を送っていたわけです。それが、四〇歳を前にして改めて占いに頼りますと、名前が悪いという卦が出たということです。「何カ月か先のある日を期して、名前を変え、一定の角度に転居して精進潔斎すると目が見えるようになります。」

す。そして、そういうチャンスはこの期を逃すと二度とありません。」と告げられたということです。これが申立人が改名を申し立てる理由であります。

これは一言で言いますと「迷信に基づく改名の申し立て」でありまして、正当な理由はないということで却下するのはまことに容易なことであります。迷信が動機となつていても、永年使用したという実績があればその名前が社会的に定着したということで改名を認めるケースがありますけれども、この申立人はそれでは間に合いませんと言っているのです。名前を勝手にクルクル変えてはいけないというルールは、取引社会を前提にしますと、そこに登場する人が主体の同一性を混乱させるようなことは困るという要請に基づくものです。この申立人の資産を聞いてみますと、今や資産と言えるほどのものは何もなく、これから取引社会に登場することも想定されない。しかも、その申立人はこの申し立ての帰趨に開眼の最後の可能性を賭けて必死に訴えているわけであります。

私としては大いに迷いましたが、もともと家事審判というのは裁量的な判断があつていいと言われています。そこで、それを頼りにこの申し立てを認めることにしました。そして、その申立人に対して「本来なら認めるのは難しい申立てなのですが、あなたの名前を変えれば目が見えるという真剣な思いに応えて、裁判所もあなたの目が見えるようになる可能性に賭けて許可することにします。もし、目が見えるようになったら裁判所にも教えて下さい。」という話をし、その人は帰って行きました。

裁判所というのは事件が沢山ありますから個々の事件のことはだんだん忘れていくわけですが、三、四ヵ月後のある日、書記官からその申立人から電話があつたと聞きました。どういう内容かというと、「目が見え始めました。裁判所に大変感謝をしています。裁判官にもよろしく伝えてください。」という電話だったので。

この話をしますと、「この申立人は女性特有のヒステリーが嵩じて見えない状態になっていたのだ。そのヒステリーが解けたので見えるようになったのではないか。」といった解説してくれる人がいます。なるほどそんなものかと思ってもみまみすけれども、不思議だという思いを拭い切れない思い出に残る事件です。

人間というのは、必ずしも理屈だけでは割り切ることのできない、理論だけでは説明しきれない不思議なものだと思います。そして、そういう不思議な人間を我々法律実務家は対象にしているのだと身に沁みて感じた事件でした。

3 事件はそれぞれの星を持つ

このように、法律実務家は、人間及び人間の繰り広げる出来事を対象としています。裁判所の前に事件としてあらわれるものは特にそういう性質のものです。「事件はそれぞれの星を持つ」というのはイタリアの民事手続法の大御所であったカラマンドレイの言葉ですが、この意味は、事件はそれぞれ定まった運命のもとに動いていくということです、刑事法の犯罪論の議論で言いますと決定論ということになります。しかし、私としては、事件の展開というのは関与した法律家によって変わる、そういう非決定論的な要素もあるのではないか、そういうものを含めて「事件はそれぞれの星を持つ」ということになるのではないかと感じています。

それとの関連で「事件が可愛い」という言い方がされることがあります。私が司法修習生のころ、民事裁判修習中に裁判官が、もう勝敗がほとんど決まっている筋のあまりよくない、訴訟代理人の弁護士も投じているような事件を一生懸命丁寧に、ああではないですか、こうではないですかと釈明をしていたことがありました。私は、法廷が終わった後で「あの事件はそんなにする必要があるでしょうか。弁護士さんもうやる気がないように思います」

れども。」と尋ねたところ、その裁判官は、「いや加藤君、私もそうは思うんだけど、事件が可愛いからねえ。」と、こういう答えでありました。

そのときの私の受け止め方はかなり微妙というか複雑で、「ああそうですか。」と、そのときの話は終わりにしたのですけれども、軽い当惑と反発を覚えたというのが正直なところです。といいますのは、きれいな花を見たり、小さな子供を見て可愛いと思うのは極めて人間的な自然な感情だと思います。しかし、事件というのは物ではないか、花とか子供といったものとは異なる無有機的なものに対して、「可愛い」というのは甚だ不適切な表現ではないか、変なことを言うなと感じたのです。しかし、何となく気になる言葉としてずっと心に残っていました。その後、自分で単独で裁判をやるようになった時に、ふっとそれを思い出しまして、「事件が可愛い」というのは、結局、自分の目の前にあらわれた事件について、自分が一生懸命に取り組み適切な解決を図ってやりたいという気持ちを込めてそういうふうに言われたのだということに気付きました。その言葉を聞いてから数年経って初めて裁判官マインドというか、広く法律実務家の仕事に取組む姿勢のバックボーンが分かりかけたと感じたことでした。

三 文系の職業としての法律実務家

1 判断と自由な精神空間

それでは仕事として法律実務家を見た場合、これはどういうものなのでしょう。大学の文科系の学部を出る人は皆どういう職業に就こうか、何をしたいか、何をすべきかということを考えるわけですが、これにはいろいろな

仕事があります。例えば、会社に入った場合を例にとっても、営業を担当して物を売ったり、帳簿をつけたり、あるいはセールスプロモーションをしたり、企画を立てたりといったように、いろいろな仕事があります。それぞれの仕事に面白さと大変さがあると思いますし、自己の適性は何かを考えることも必要でしょう。しかし、ある程度知的レベルが高い層の人達をとって考えますと、何をしたいかといえ、おそらく、自分自身で物事を決定していく仕事、つまり判断する仕事をしたいと思うのではないのでしょうか。

そこで、裁判というのはどういうものなのかという裁判の原型を考えてみます。これは、ある人が、「私はこういう言い分があります。私の言い分を裏づける証拠もこんなものがあります。」と言うのに対して、もう一人の人が、「いやそうではありません。真実はこうで、自分の言うことが正しいのです。私の言うことが正しいことを裏づける証拠だってこういうものがこんなにあります。」と言うわけです。そして、二人がそれぞれの言い分と証拠を出して、「さあどちらの言い分が正しいか決めてください。」という仕事で裁判の原型です。それは、まさしく判断の仕事にはかなりません。その判断の過程において判断の材料となる情報が収集され、その収集した情報を分析して処理していくというプロセスが裁判であります。現代社会は、情報化社会と言われていますけれども、裁判の仕事というのは判断の仕事ですから、それ以前からずっと情報処理の本質を持った仕事であつたわけです。

ところで、判断の仕事は裁判以外にももちろんあります。例えば、行政の政策決定というのは判断そのものですし、企業の経営戦略上の意思決定ももちろん判断です。しかし、考えてみるとすぐ分かりますけれども、そうした判断は、その組織のトップないしそれに近いところに来ないとできません。ところが、裁判官は若いなりたての判事補のうちから判断をするのが仕事でありまして、そういうことを若いうちからできる仕事というのはあまりない

のではないかと思います。

ただ、判断といっても、いろいろ制約があるのでは気が重いわけですが、裁判官のする判断は法律と良心に拘束される以外に制約はありません。私は法律に拘束されるのは嫌だという人は裁判官に向かないということになりますし、私は良心に拘束されるのは嫌だという人は人間をやめてもらわなければいけない（笑）。そうすると、裁判官には「ほとんど拘束のない知的な営みをしていくための自由な精神空間」があるということになります。職業生活において自由な精神空間があるということの良さは学生のうちはよく分らないですね。修習生にしても本当はよく分らない。実際なってみないと、どれだけ気持ちがよくてすがすがしい心持ちかというのは分からないですね。毎日毎日、自由な精神空間というものがあつて、あなたがいいように決めたらいいですという仕事はそれに耐えられる力がないと辛いのですが、大変ありがたいと思うわけです。

2 プロフェッションとしての法律実務家

そして、法律家は、裁判官だけではなく、検察官でも弁護士でも、さまざまな局面で大なり小なり判断をする仕事であります。「判断」という要素こそが法律実務家の主要キーワードであります。

法律実務家は、プロフェッションと言われていますが、伝統的なプロフェッションというのは法律実務家と医師と聖職者です。聖職者は心の問題を扱い、医師は体の問題を扱い、法律家であれば人と人との関係、社会関係の問題を扱います。しかも、それぞれが人生の危機に直面したときに人と接するという仕事です。加えて、プレイヤートな事柄を扱うけれども、パブリックな面につながっていくという要素を持った仕事であるという点で共通する面があります。

そして、プロフェッションには三点特色があると言われています、第一は、高度の専門知識と技能が必要な仕事であるということです。第二は、高い職業倫理が求められる仕事だと言われています。例えば、医師が、夜中に血まみれの人がかつぎ込まれた場合、明らかにお金を持つていない人であることが分かるようなときにも、そういう救急患者の診療を拒否したり、放置するということは医師の倫理上できません。また、聖職者であれば、犯罪をしたというある人の懺悔を聞いたとしても、それを捜査当局には通報しないという倫理があります。法律家にも、これらと同様に、高い職業倫理が要請されます。第三に、その職能団体によって後継者が養成される、先輩が後進を指導養成していくという特色があると言われています。

四 法律実務家に要求される基本的資質

1 陽気

そういう職業としての特色を持つ法律家にはどのような基本的な資質が要求されるのでしょうか。どういう資質を持った人が法律実務家に向いているのでしょうか。私は、陽気、勤勉、誠実という三点に要約されるのではないかと考えています。

まず陽気ということです。法律家の対象とする事項は、もちろん、常に悲しいことばかりではありませんが、必ずしも明るいものとはいえない事項を扱うことも少なくないわけです。その人の人生が危機に瀕していたり、人の生き死に、企業の命運に係っているといった事柄もあるわけで、それだけに意識して陽気にそうした仕事に立ち

向かうという資質が求められると思うのです。

例えば、皆さんが弁護士になってある人の法律相談を受けた場合に、皆さんの応答を苦にしてその人が帰りがけに橋の上から飛びおるというようなことでは困るわけです。とりあえずこれで安心だということで事務所を出るという対応をする、それが自然にできるという資質が必要なのではないかと思っています。

こういう話を司法修習生にしますと、毎年必ず一人ぐらい後で来まして、「教官、私は暗いと言われていますけれども、法律実務家には向いていないのでしょうか」という質問をする人がいます。そういうふうに聞いてくることが問題ではないかと思えますけれども（笑、しかし、そう言うわけにはいきません。「いやいや、そういうふうに自分を分かつている内省的な姿勢というのは大変いいことです。私が言ったのは、陰湿で意地悪であつたらいいないということをやったのであつて、あなたのように自分のことが分かるというのは決して悪くはないし、そのつもりさえあれば、これからどんどん自分を変えていくこともできますよ。」と答えますと、まあそうかということでもまた暗い顔して帰っていくわけです（笑）。

2 勤勉

次に勤勉です。大体において、司法修習生というのは、現に勤勉か、かつて一度は勤勉だったことがあるといえると思います。というのは、今の司法試験は勤勉でないとなかなか合格はできないということです。中には運がよかっただけという人がいます。したがって、力をつけるか、運をつけるか、どちらかだということになります。運がよかっただけの人というのは試験である以上に常にいます。けれども、運だけにいつまでも頼ってはいけません。

法律実務家がどうして勤勉であることを要請されるかというと、法律の勉強というのはある程度までいくのに必ず一定の時間がかかる、これは頭のよしあしにかかわらず、そうなのです。そして、資格取得後も、法律が変わったり新しい判例が出たりしますから、継続的な勉強が必要不可欠です。これを怠って最新のところを調べずに、自分の受験時代に培った知識だけで実務に当たっていると、相手方となった成りたての弁護士にころりと負けるということがベテランでも幾らでもあります。そういう意味で、法律実務家は、ずっと自然に勤勉であり続けるという資質が必要だということです。

3 誠実

三番目には誠実です。これは人間としての美質でもあります。こういうことかといいますと、法律実務家の仕事には一から一〇まで全部自分でする仕事と、複数の人が共同でする仕事とがあります。裁判官であれば合議体を組んで事件を処理することがあり、検察官であれば何人かで共同捜査をしていくことがあります。弁護士も大きな事件では弁護団を組んで取り組むということが珍しくありませんが、そうしますと、当然のことですが、仕事を分担してやっていくことになります。こうした場合には、ある人がした仕事について、他の人はポイントについてレビューないしチェックするわけですが、ポイント以外のところは彼又は彼女がやってくれた仕事であるから、それで安心だということで進んでいきます。それは一々同じ程度の時間をかけて繰り返し見なくても誠実に仕事をしてくれているだろうという信頼が基盤にあるからなのです。しかし、それがそうではない人、あるいは、そうではないかも知れない人であるということになりますと、共同で仕事をしていく基盤が成り立たないということになります。誠実さが法律実務家の資質として必要であるというゆえんであります。

五 法律実務家の仕事のスタイル

それでは法律実務家はどのようなスタイルで仕事をしていくものなのでしょう。これは人によってさまざまなのですけれども、理念型というほどのものではありませんが、ある程度はつきり分かる形で説明しますと、「動と静」の対照的な二つのスタイルがあります。

「動のスタイル」というのは、裁判官に限定しますと、裁判官は何でも知っていないといけない、何でも知っていたほうがいいという発想を基本にしています。そして、当事者の主張におかしな部分があれば、「いや、それは違いますよ」と釈明を求め、当事者の提出する証拠をみて、「これはちょっとおかしいですよ」というように嘘をたちどころに見破るといった具合に博覧強記で積極的になりばりやっていくというのが裁判官として在るべきスタイルであるという考え方です。したがって、「動のスタイル」では、裁判官は、飽くことなく知識を広げ、深め、技能を向上させていくことが目標となります。

それに対して、いやそういうものではない、裁判官は知っていることが多いほうがいいけれども、何でも知っている必要はない、そもそも何でも知っているということは無理ではないかと考える立場があります。これが、「静のスタイル」で、裁判官にとって何が大事かという点、だまされないことであるという発想が基本となっています。そして、だまされないためには心を澄んだ状態にしておくことが必要であって、自分の心を深い森に抱かれた静かな湖のように保っておいて、鏡のような湖面に石を投げ込むとポチャンと音がして波紋が広がっていく、主張

や証拠は小石で、心の中に波紋が広がっていくことによって本当か嘘か見分けられる、物事の本質が分かるという事が大事なのだという考え方であります。したがって、「静のスタイル」では、裁判官は人格の修養が目標になります。

これらは両極端なのですが、通常の実務家はこの二つのスタイルを行ったり来たりしています。といいますか、両者の中間にあるというのが実際ですけれども、基本的にはその人の個性と持ち味でやっていけばいいわけです。

「それでは、あなたはどうかのですか」と尋ねられると、これは結構難問です。あるとき、関西の落語家の桂枝雀が、自分の理想とすべき噺家についてトーク番組で語っているのを聞いて感心したことがあります。桂枝雀が言うには、「自分がなりたい、在るべきだと思っている噺家というのは、高座に上がって何を話すのでもなくて、ニコニコして機嫌のいい心持ちで座っている。そうすると自分のニコニコした機嫌のいい状態がだんだん客席に伝わって、お客さんも何となく楽しいような気分になってニコニコ機嫌のいい状態になっていく。どんどんどんどんそれが広がっていき、時間が来ると、ご退屈さまということで高座をおりる。これが自分の考えている噺家の理想だ。」ということです。「噺をしない噺家」が理想であるというわけです。

これを聞いて、なるほどと思ひまして、裁判官の姿に当てはめるとどういうことになるかとずっと考えています。最近では、自分としてはこういう法廷を実践したら理想的であると考えていることがあります。それは、裁判官である私が機嫌のよい生き生きした状態で法廷に入っていくわけです。そうすると爽やかな雰囲気満たされて心温まる空間ができ上がります。民事事件であればそういういい雰囲気の中で強欲な主張をしていた原告は、「無

理な主張をしていたらいけない」ということで無理な主張を引っ込め、引き延ばしを図っていたずらい被告は、「これはまずいな」と考えておのずと事件が和解に流れる。したがって、もう判決を書く必要がない、判決を書かない裁判官（笑）、これがいいのではないか。刑事事件であれば、警察でも検察でも頑強に否認していた被告が、その法廷の温容に触れて我に返って非を悔い改めて涙を流して自白する、こういう法廷が理想ではないかというように、半分冗談ですけども考えています。

そういうわけで、自分の個性、持ち味を生かしてやっていける仕事が法律実務家の仕事だということであります。

六 法律実務家に要求される能力

1 核となる論理的思考力

それでは、法律実務家として、どういう能力をつけたらいいのかという話に入ります。「法律家に要求される能力」については、よく言われることですが論理的な思考力が必要不可欠だと思います。その論理的思考力の中身というのは、論理的に分析していく力と、分析したものを統合していく力でありまして、理詰め議論もできるし、そうかといってバランス感覚を失うということもないということが大切です。論理的分析力は、具体的な事実関係から問題を発見して、それを現行法体系ではどのように評価すべきかという分析を理詰めで行っていくという力です。

それだけですと、理屈倒れになることがあるわけで、それを避けるために、法律実務家には統合力が必要で、バランス感覚ないしスジ論で理詰めに出てきた結論をチェックするというのが必要です。分析力と統合力の両方が必要なのです。

法律実務家の中には、問題分析力はあるけれども、それを統合する力のない、あるいはそれが劣っているという人が稀にいます。稀以上にいると言う人もあります。どういふことかというところ、「細かく積み上げていって大きく間違えてしまう」ということです。こういう人は修習生にもいますし、当然のことながら実務家にもいます。細かく積み上げていって、その一つ一つは正しいのに、どこか基本におかしなところがあるか、バランス感覚に欠けるところがあるものですから、最後の結論を間違ってしまう。自分は、どこがどう間違ったのかということが分からないので悲劇的なのですが、こういう人はやはり統合する能力を身につけることを怠ったということになるかと思えます。

2 深い推論と浅い推論

次に「深い推論と浅い推論」ということですが、最近の知識工学でディープ・リーズニングとシャロー・リーズニングということが言われています。この教室には空調が入っていますが、その空調の設備が壊れた場合には、専門家を呼んでくることになります。その専門家が故障箇所をどのように見つけるかといえば、「具合の悪い可能性のある個所が複数ありますが、一番可能性があるのはA、B、CのBだと思います」ということで、Bを見ますと、果してBが悪いわけで、そこを取替えれば直るということがあります。これが「浅い推論」です。詳しく説明しないでもどこが問題なのかがぱっと分かるというのが「浅い推論」です。

しかし、その専門家に「どうしてBが悪いことがすぐに分かったのですか」と聞くと、「ああ、それはこういう現象が起こったときには、その原因はA、B、Cという可能性があって、その可能性は、甲という点からするとAとCが潰れて一番頻度の高いのはBで、他にも同じような事例をいくつか経験しているの、Bではないかと思つて見たところ、そうだったのですよ」というように説明してくれます。どうしてそのようになるかを説明できる力が「深い推論」です。ですから、司法試験にひき直してみると短答式試験はシャロー・リーズニングを試すのに対し、論文式試験と口述式試験はディープ・リーズニングを試すという言い方もできるかもしれません。法律実務家にも、そういう深淺両方の推論をすることができる能力が必要です。

3 広がる職域と法律実務家に要求される能力の多角化

法律実務家の活動すべきフィールドは、近時の状況をみると、どんどん広がっており、そこで要求される能力も昔と比べて一層多角化しいろいろなものが増えてきていると思います。裁判に限定して考えても、直ちに思いつくだけでも五つほど、こんなふうにできたらいいと思われる能力があります。

第一に、複雑な難しい事件に対して、たちどころにその複雑さの中味を分析して法的構造を解明することのできる能力が求められます。

第二に、そういう複雑な事件でなく、大多数の普通の事件を誤ることなく着実に処理していく能力が必要です。私は簡単な事件はときどき間違ふんですというのは、何の自慢にもなりません。当たり前的事件を着実に間違ひなく処理していくという能力が求められるわけです。

第三に、特に民事事件ですが、判決をすると紛争解決として意味がなくなってしまうような事件について諦めず

に当事者を粘り強く説得して合意に基づく解決、和解的解決に導いていくという能力が必要です。そのためには説得力とか、言葉で問題状況ないし利害状況を説明して、どのようにするのがいいということを訴訟当事者に納得してもらっただけの力量が必要だということになるわけです。

第四は、規模の大きな公害、薬害等の現代型訴訟に関する事柄です。こうした訴訟は、訴訟関係人が多く、しかも、その訴訟関係人の疑惑が必ずしも一本化になっているかどうか不明なことが少なくありません。こうした大規模訴訟について、訴訟関係人の各様の意見を調整して訴訟の審理を軌道に乗せていくという能力も求められるようになってきています。

第五には、そうした能力はどれもこれもそこだけでも、その人がいるだけで雰囲気や和んで皆が楽しく仕事ができるという能力もあると思います。これは、能力というよりは人柄ということになるかも知れませんが、そういうものも必要です。特に裁判官は、裁判官だけで仕事をしているわけではありませんで、書記官、事務官、速記官といった異なる職種の人達とチームで仕事をしています。また、訴訟運営というものは、民事事件であれば、訴訟代理人である弁護士との、刑事事件であれば、検察官や弁護人など訴訟関係者との協働作業であるという側面を持っています。ですから、幾ら頭がよくて判決を名文で書くことができる裁判官であったとしても、一緒に仕事をする人達に嫌がられたり、訴訟関係者から無用な反撥をかうような物言いをするということでは困るわけです。

これからの社会構造ないし社会状況の変化に伴って法律実務家に期待されるものはどう変わるでしょうか。これからの社会は従来と比べて、規制緩和を進めて、真の意味での自由競争を次第に広げていかなければいけないとい

うことになってきています。これは国際化時代に向けてアンフェアでない取引社会を構築すべきであるという声から内からも起こり、外圧としてもこの問題を突きつけられているわけですから、時間の早い遅いはあれ、そういう方向に進まざるを得ないと思います。そうしますと、事前の利害調整としての規制が緩み、行政指導が後退しますから、もろに利益衝突が頻発する社会となります。今まで行政指導という形をとって、必ずしも透明性が高いとはいえないスタンダードでそこそこうまくやってきた状態は徐々に、あるいは一気に覆ることになりますから、先例のない紛争がふえてくると思います。

そうした紛争が起こってくる社会で、どのようにこれを解決処理していくかということになると、やはり原理原則に立ち返った上で、規範はこうであると宣明してそれを了解可能な言葉で説明し、皆がああそうだと納得・了解するというプロセスが重要です。そうすると、そこに、そういう役割を担うことのできる人が登場することが期待されることになりますが、それはおそらく法律実務家であろうと考えられます。したがって、これからは今まで以上に法律実務家の能力、法律実務家の仕事に期待されるところが加速度的に広がってくると思います。現在の日本の社会が、まさにそういう状態にあるということは頭にしっかりと置いていただくとよろしいかと思っています。

七 法律実務家の生きがい

次に、「法律実務家の生きがい」の話に入ります。まず、法律実務家は、専門的技術を備えていなければいけません。そうした専門的技術を駆使することによって当面する一定の問題状況を解決していくのですが、これはマニ

ユアルには載っていない、マニユアルだけでは済まないいわば手づくりの味です。ですから、質の高い自己実現ができるわけで、これが法律家の生きがいの根本、基本ではないかという気がします。

さらに、そうした法律実務家を持つべきである専門的技能というものは上限は切りがありません。法律実務家を見渡すと、大変よくできる人というのは何人でもいるわけで、上を見たら切りがないし、下を見たら後がない（笑）。そういうことから、専門的技能をだんだん伸ばしていきたいと、まともな法律実務家は、常に思っています。しかも、仕事に振り回されて消耗していくのではなくて、仕事の中で経験を積み自分を太らせて豊かにしていくことができます。今日の仕事が明日あるかもしれない仕事のためになるという仕事なのです。ですから、半分修行みたいなものだという感じもします。決してその日暮らしではない、明日につながる、あさってにつながる、先々につながる。これも法律家の仕事のほかには、ないとは言わないけれども、明日につながる仕事の中で自己形成していけるということをもつて感じるこのことができる仕事だと思うわけです。これは、まさしく法律実務家の生きがいであります。

そうしたことを考えると、いささか口幅つたい言い方で申しわけないのですが、法律実務家の仕事というのは芸術家の仕事と似ています。遠慮して言えば職人の仕事と似ている。ですから、「アートとしての法実務」と言われることがあります。

法律実務家が芸術家に似ているとしますと、その仕事ぶりに対する評価も芸術家の評価に似てきます。どういった人が法律実務家の中で評価され、尊敬されるかというと、仕事のできる人、よい仕事を重ねた人です。問題状況が分かる人であり、問題解決の方向の読める人であり、一緒に仕事をしてよかったと思われ、語り継がれる人です。

決して立身出世をした人や経済的に成功した人だけが法律実務家の世界の中で評価されることはありません。司法修習生に「経済的に成功しようと思って弁護士になるのはいけない。二三区内に庭つき一戸建てを建てようと思って弁護士になってはいけない」とよく話すのは、このことです。そうならなければ、弁護士として失敗だったのかといえば、全然そんなことはないわけです。世俗的な意味で偉い人が偉いとか、弁護士会の理事者になった人が偉いということでもありません。そういう意味では面白い世界です。

法廷の構成員として廷吏という仕事をする事務官がいますが、ベテランの廷吏さんなどとの間でだんだん気心が知れてくると、「いやあ、何年前のだれそれ判事と一緒に仕事をしていた時に、こういう事件で、こんなことがありました。自分としては本当にその人と一緒に仕事をしてよかったと今でも思う。」という話をしてくれるようになります。その話題となった裁判官が必ずしも顕職に就くことはなくても、そこで一緒に仕事をした廷吏さんがずっとよかったと思ひ語り継いでくれるということだけで、その人は裁判官として立派な人だったのだなと後輩の私などは思うわけです。

八 結び——法律家を志すということ

1 法律家は職業か

「法律家を志すということ」はどういうことなのでしょう。これまで述べたようなことを考えてきますと、法律家は果たして職業なのだろうかと思ひます。もちろん、普通はそれで生計を維持していくわけですからその意味

では職業なのですから、職業であつて、かつ、ややかつこうよくいえば自分の生き方そのものなのではないかという気がします。そして、その目的は、正義の実現のほかありません。皆さん方もおそらく司法試験に挑戦しようと考えたスタート時点では、法律家になつてこんなことをしてみたい、あんなことをしてみたいと思つたことがあるはずです。それは個々の間に聞けばいろいろな答えが返つてくると思ひますけれども、要約すれば、正義を実現したいということだろうと思ひます。これが根底にあるということが重要であつて、これがありさえすれば法律実務家というのは他の誰から偉いと誉められることがなくてもやつていけるわけです。「法律実務家にとつて、勲章は外から与えられるものではない、我々の胸のうちに予めある」、そういう仕事であり、生き方だと思ひます。

さらに、法律実務家は、ある程度知的でないといけませんし、知的な生活を送ることを要請されます。「私は頭を使うよりも体を使うほうが好きです。」という人がたまにいます。司法修習生にもいまして、私は謙遜だろうと思ひのですが、本当にそういう人がいるようです。そういう人は無理に法律家になることもなかったのではないかと感じもします（笑）。もっともそういう人がいても別にそれはそれでかまわないわけですけれども、そういう人でも知的であることは避けられません。そして、知的であつて、かつ、人に対して働きかけていく仕事ですから自分だけで自己完結してはいないわけですね。人間あるいは人間が繰り広げる出来事に対して、あることが起つてゐるのはこういうことが原因ではないかという洞察力がないといけない、上辺だけで惑わされてはいけないわけです。そういう洞察をした上で、それがどうかという評価、判断を加えないといけない。そのためには、社会について、あるいは人について、人生についての見方というものに見識がないといけないだろうと思ひます。自分のスタンダード、座標軸がなければいけないことでもあります。

2 洗礼としての司法試験

そういう職業集団に入るに当たって洗礼として司法試験があるわけで、クリアしなければいけない当面の関門であります。これは受験勉強はできるだけ短く済ませて早く受かるほうがいい。

どういう人が早く受かるかということを教官をやっている司法修習生を見ていますと、ポイントは四つです。

一つは、基礎的な学力があることが必要です。基礎的な学力というのは、大学に入るまでに培った学力です。これは筋の通った事柄を適切な言葉で綴ることができる一般的な意味での文章力、一定の内容のある論説を正確に読み取り理解することのできる読解力、人の言うところを了解した上で自分の主張を展開することのできる表現力や折衝力などです。

二つ目は、方法を誤ったらいけないということです。方法については、最近はず備校をはじめとして各種の受験情報が流布されていて戸惑うわけですが、基本は大学のしっかりした授業を聞いて、ゼミに入って議論する、基本書を繰り返し読んで、自分の頭で考えるところとだろうと思います。別に予備校に行ってはいけなとは言いませんけれども、こうした着実な方法を回避してはいけません。安直な方法というのは近道のようにいってそうではないですね。こういうことが起こるかという、「私は、予備校の論点集だけで勉強し、基本書などは読んだことがありますね。」という比較的若手の司法修習生がいます。そういう人の中には、判決書を一本起案させてみると、論点Aと論点Bはそれぞれ理論的に関連しているので、Aのところでも甲説をとったBのところでも甲説をとらざるを得ないということでも、Bでは乙説を平気でとるというように、全然理論的な関連性に気づくことなく議論してしまふことがあります。これは体系的な思考、体系的な知識が身に付いていないことが原因ですが、それ

では司法試験は運よくパスできたかも知れませんが、法律実務家としては困ってしまいます。そのことに早い時期に気付けばそれを直そうということになりますけれども、若くてなまじ自信があるだけに気付かないままでいくと先々大変に困るということになるわけです。

三番目には、前にも触れましたが、一定の時間が必要です。私は頭がいいからあまり勉強しなくても受かると思っている人があると思いますが、残念ながら一定時間以下の勉強量でパスすることはありません。合格体験記を見ますとかつこうをつけるためか、あまり勉強せずに合格したかのように書いてあるものがありますが、実際はもう間違いない一定時間はしていると思わないといけないですね。ですから頭のいい人にはかえて辛いということがあるかも知れません。問題は、一定時間をどの時期にかけるかというだけのことだと思います。合格平均年齢が現在二八歳台ですから、その年頃の修習生に聞いてみますと、学部時代から熱心に取り組んでいるわけではなくて、卒業するころから本腰を入れましたというような人が多いようです。「司法試験は難しい、合格平均年齢が二八歳だから」というので出だしが遅くなり、そして、大体自分がイメージしている時期にようやく合格するということではないでしょうか。それを前倒しにすれば幾らでも合格時期を早めることはできると思います。

四番目は、これはやや抽象的な話になるわけですが、志です。自分は何のために法律実務家になるかという自分の思いがしっかりとった人は早く受かるように思います。司法試験に通ったらかつこうがよいとか、頭がいいと皆が思ってくれるから受けようかと思う人はいないでしょうけれども、もちろんそういう動機ではそんなに簡単にはいきません。

法律実務家にとって、リーガル・マインドが大切だといわれます。リーガル・マインドはもちろん大切なのです

が、知識のないリーガル・マインドというのは自己矛盾です。そして、志のない知識というのも無力なものだと思います。これからの社会は法律家に期待される役割がどんどん大きくなっていくわけですから、できるだけ優秀な人達が後に続いてくれることが法曹界を活性化するとともに、司法の分野が社会の需要に对应していける基盤を形成、強化していくことになると思います。もちろん、官庁に入る人にも有能な人が必要でしょうし、民間企業に行く人、大学に残る人にも優秀な人が必要で、法律実務家の世界だけが優秀な人材を独占することはできないし、すべきでもないと思います。しかし、今日お話ししたようなことを頭に置いて、本腰を入れて司法試験に立向かうと一人でも多くの方が思ってくださいれば、私としてはこれ以上嬉しいことはありません。

以上で講演を終わります。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

小口 大変経験に裏打ちされました含蓄のあるお話だったと思います。加藤先生にはいつもお越しいただくというわけにいきませんので、こういう機会に皆さんのほうで何か今のお話に関連して、どうしてもこの辺のところをもう少し深く聞いてみたいといったような点がありましたら、質問を受けつけますけれども、いかがでしょうか。

質問 私、法律を勉強している者なんですけれども、毎年七〇〇人ぐらいの人が司法試験に合格して司法修習生として司法研修所に入ってくるかと思うんですが、その入った人の中で、検察官、弁護士、裁判官に向く資質といったようなものがあるのか。

もう一点なんですけれども、司法試験に受かったから司法研修所に入っていたとは思いますが、その中で、やはり向かないような人もいるのかどうかというところも教えていただきたいと思っています。

加藤　まず、後のほうの質問ですが、最近は、司法修習生は七〇人以上採用されているわけですが、五〇〇人時代と比べてどうかということになると、学力的な面での変化はほとんどありません。ですから、能力的に見れば知的な仕事である法律家に耐え得ないという人は一応ないと言えますけれども、社会人としての規範を逸脱することを何とも思わないという人が稀にまじっています。司法修習生に対して、修習開始の初日に、「司法修習生の諸君は今まで、司法研修所に入るまで人格をテストされたことは一度もありません。善人かどうかというようなテスト、モラルが高いかどうかというテストを全くされてはいないわけです。しかし、倫理性の低い人、例えば、人の所有物を盗んで平気だという人が法律家になってもらっては国民としては大変困ります。したがって、諸君が修習期間である二年間に規範違反をした場合には、それは法曹に向かない資質であると評価されて、場合により、修習生を辞めてもらうということがあります。二年間は、そうしたスクリーンの意味もあるのです。」という話をして注意を喚起しています。現にそういう事由で修習途中で修習生を辞める人がいるかどうかということは職業上の秘密ですから具体的には言えませんが、抽象的に言うところ、そういう残念な人が過去にはいたことがあるというのが率直なところです。

次に、最初の「法曹三者それぞれに向く資質というのはあるのだろうか」というご質問ですが、それはおそらくあるのだらうと思います。司法研修所は、民事裁判、刑事裁判、検察、民事弁護、刑事弁護という五科目がありまして、五人の教官がいて、それぞれ自分の仕事に魅力があるという話を意識的、無意識的にします。司法修習生

は、それを聞き、実務修習を体験して自分がやりたいと思うものをだんだん絞っていくことになるのが通例です。そういう話の一つとしては、これは私が言うのではなく、檢察教官が、いささか我田引水的に言っているのですが、「勉強の好きな人は裁判官になるといい。お金の好きな人は弁護士になるといい。人間が好きな人は檢察官になるといい。」というもので、なかなかうまくできているなと思います。それはそれとして、修習生を見えますと、経済事象に比較的関心があつて、組織的に拘束されるのを好まないという人は弁護士になることが多いというのを感じます。それから、規範がどういうメカニズムで社会生活をコントロールしているかという辺りに関心を持っている人は裁判官になる人が多い。また、検事になるのは、きつぶのいい好漢、社会の不正を許せないという正義感の強い一本気な人が多いような気がします。

質問 裁判官とか檢察官になると、非常に人の人生とか運命を変えるような裁判に当たる場合があると思うんですが、そのような非常に重い責任を感じた場合に、自分自身がその責任を負い切れるかと悩むことはあり得ると思うんですが、そういう場合はどのように考えていくんでしょうか。

加藤 いい質問で、かつ難しい質問です。判断に迷うということ、しかも、他者に重要な影響を与えるという場面判断に迷うということは幾らでもあります。それで病気になる裁判官もいます。自分には耐え切れないから辞めようということで転身する裁判官の例を聞いたこともあります。刑事裁判官で大変良く出来る人なのですが、その人が、被告人を実刑にするか、執行猶予を付けるか、判決宣告の当日のぎりぎりまで考え続けたため、朝起きてパジャマの上にそのままズボンをはいて裁判所に登庁してしまったことがあるという笑い話のような実話も知っています。

そこで、直接質問にお答えすることにはなりませんけれども、一つのエピソードを紹介します。あるときに同期の弁護士から、「自分は事件のことが心配になって夢に見て夜中に飛び起きることがある。裁判官はそういうことはないのか」という質問をされたことがあります。私はそれに対して、意図的に「裁判官にはそのようなことはない―実際、私はないのですけれども―。どうしてないかという、結局、事件を客観的なものとして、人ごとだということで見ているから、それであなたみたいに夜中に飛び起きるということはないのだと思う。」と答えました。それは多少挑発するつもりもあって、そのように答えたのですけれども、彼はそれを聞いて、「それでいい。裁判官というのは客観的に事件を見る、人ごとだと思っただけで初めて心情的にどちらかに肩入れして見ないで済むことができるわけだから、それはそういうことでもいいと思う」と言ってくれました。

ただ、実際にはどうしようかと判断に迷うことは少なからずありまして、夜中に飛び起きることはないにしても、寝つきが悪いというようなことはあります。ありますけれども、それはしかし、それこそがまさに自分の仕事であるわけですから、自分の能力、自分の持てる時間、そういうものの限りを尽くして、それで自分がこうだと思っただけで判断をする以外ないのではないかという気持ちでやっています。

それでお答えになっっているかどうかわかりませんが、一応そんなところです。

小口　ほかに質問がないようですので、これにて加藤先生の講演を終わりにしたいと思います。

先生、どうもありがとうございます。(拍手)

(かとう　しんたろう　司法研修所事務局長・判事)